

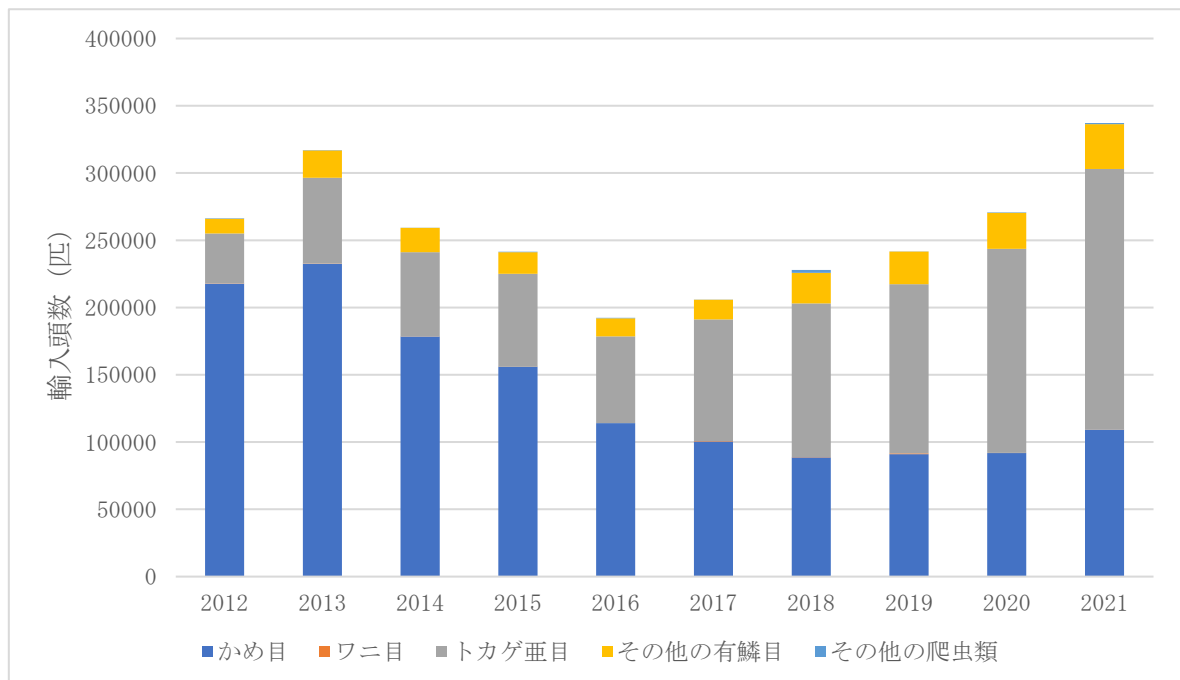
## 爬虫類の飼育状況について

### 1. 爬虫類の輸入推移について

近年、日本における爬虫類の需要は増えており、財務省貿易統計をみると図1のように推移している。2016年まで「カメ目」が減少しているのは、活スッポンの輸入量が関係していると思われる。

2016年を起点に徐々に爬虫類の生体輸入量が増加している。特に「トカゲ亜目」やヘビ亜目を含む「その他の有鱗目」の輸入量は増加し続けており、それぞれ2021年は2016年の約3倍となっている。2018年からは爬虫類の中で「トカゲ亜目」が最も輸入量が多いが、ヒョウモントカゲモドキ等がペットショップで人気が出ていることが関係していると考えられる。(図2、図3参照)

図1 日本の爬虫類生体輸入量（財務省貿易統計より作成）<sup>1</sup>



<sup>1</sup> 財務省貿易統計 <https://www.customs.go.jp/toukei/info/>

図2 ヒョウモントカゲモドキ<sup>2</sup>

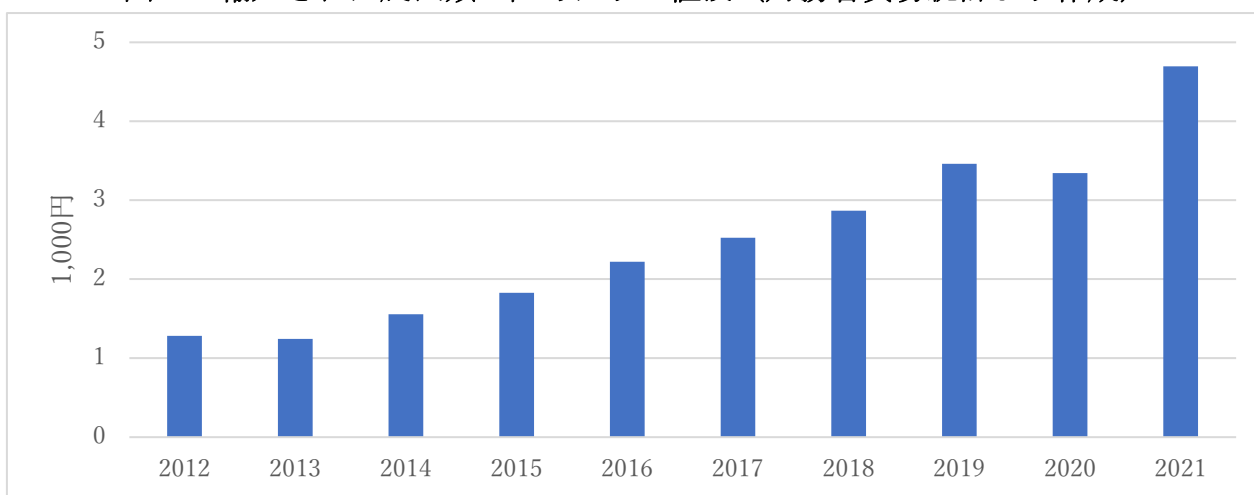


図3 ヒョウモントカゲモドキ販売の様子



また、輸入された爬虫類の1匹あたりの値段も高騰している。2021年は2012年の約3.7倍にもなっている。

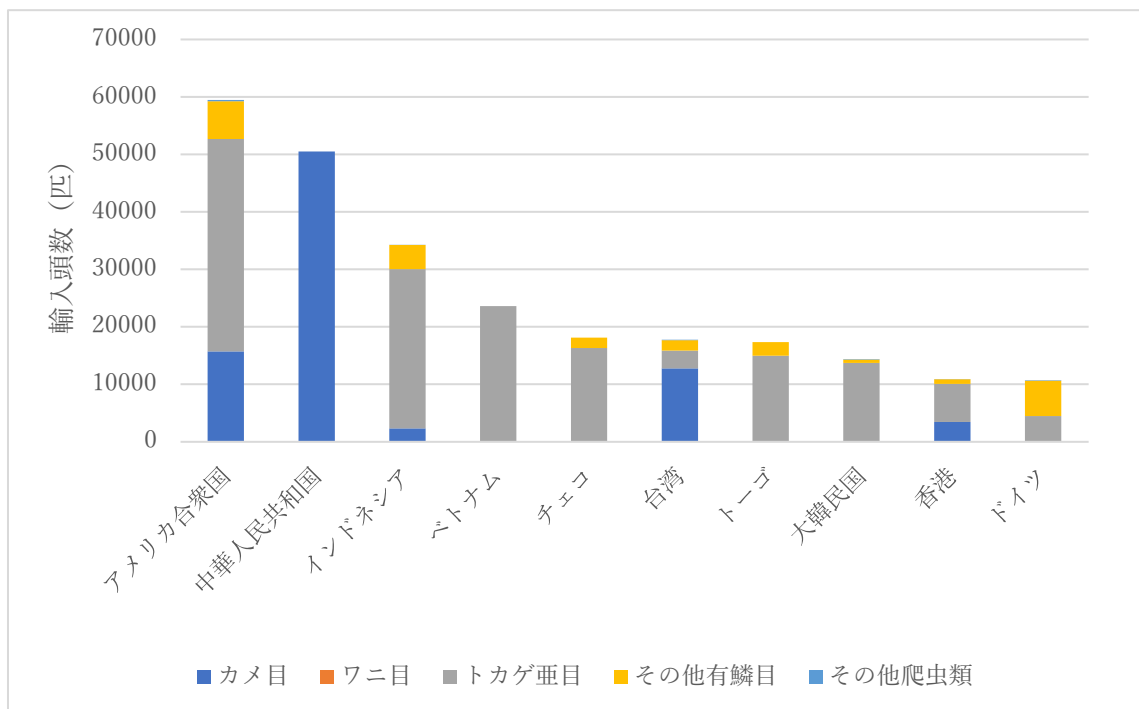
図4 輸入された爬虫類1匹あたりの値段（財務省貿易統計より作成）



2021年の日本における爬虫類の輸入元は図5のとおり。国によって輸入している爬虫類が異なることがわかる。輸入している爬虫類の種類は主に「トカゲ亜目」が多い。中華人民共和国と台湾では「カメ目」が多いが、これは食用のスポンの輸入が関係している。ヘビ亜目を含む「その他の有鱗目」はアメリカ合衆国、インドネシア、ドイツからが多い。

<sup>2</sup> 国立環境研究所「侵入生物データベース」<https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/DB/detail/30370.html> 出典

図5 生きた爬虫類の国別輸入頭数 TOP10（財務省貿易統計より作成）



## 2. 爬虫類の飼育頭数増加について

近年の爬虫類が人気の理由として、下記の点が挙げられ、これらの条件から、一人暮らしでも飼う人が増えていると推察される。

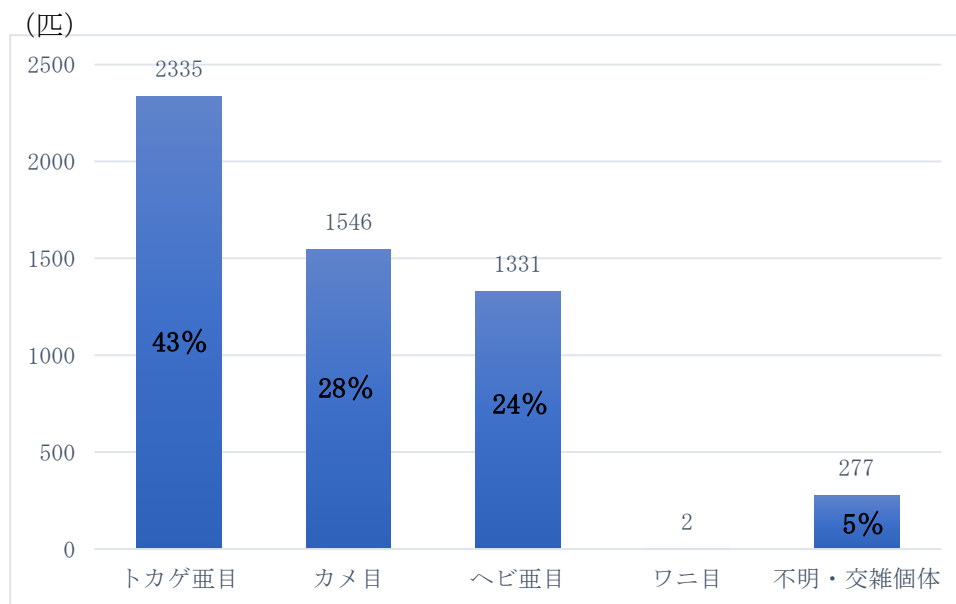
- ・省スペースで飼育可能
- ・餌を毎日与える必要がない
- ・散歩の必要がない
- ・臭わない
- ・鳴かない
- ・初期費用が犬、猫より安い

その他、下記の点も大きな要因となっている。

- ・餌や飼育用具の改良により、生餌を与えなくても飼育できるようになった。
- ・飼育下繁殖により様々な色や柄を持つ品種（モルフ）が確立された。
- ・インターネットの普及により飼育情報を得やすくなった。
- ・ホームセンター内のペットショップや展示即売会等でも購入でき、入手が容易になった。

WWF が行った 2017 年の爬虫類市場調査では、販売されている爬虫類の中で、トカゲ亜目が半分近くを占め、残りはカメ目とヘビ亜目であった。ワニ目はほとんど扱われていなかった。

図6 爬虫類の販売数と割合 (2017年 WWF 調べ)<sup>3</sup>



### (1) トカゲ亜目

飼育されているトカゲ亜目の中ではヒョウモントカゲモドキが7割を占め、次にフトアゴヒゲトカゲが人気であった。

図7 フトアゴヒゲトカゲ (販売店にて)



<sup>3</sup> WWF 「日本のエキゾチックペット取引」 <https://www.wwf.or.jp/activities/data/20200611wildlife01.pdf> 参照

表1 トカゲの品種ランキング（アニコム『家庭どうぶつ白書 2021』より）<sup>4</sup>

順位	品種	頭数	割合 (%)
1	ヒョウモントカゲモドキ	497	71.1
2	フトアゴヒゲトカゲ	132	18.9
3	トカゲ	18	2.6
4	クレステッドゲッコー	13	1.9
5	エボシカメレオン	11	1.6
6	グリーンイグアナ	6	0.9
7	サバンナモニター	5	0.7
	ヤモリ		
9	アカメカブトトカゲ	2	0.3
	アンボンアオジタトカゲ		
	イグアナ		
	オニプレートトカゲ		
	カメレオン		

ヒョウモントカゲモドキが人気となっている理由として、小型で色や柄も豊富で、仕草が魅力的であるという点が挙げられる。動きがゆっくりで、尾を振ることがある。また、まぶた（瞬膜 / 第三眼瞼）があることで眠そう、興奮といった表情が豊かなことも魅力である。尾に栄養を貯めることができ、餌を毎日与える必要がないため数日家を空けることも可能である。専用の人工フードがあるため、餌の入手も簡単である。なお、国内繁殖の個体も多い。

フトアゴヒゲトカゲは温厚な性格で、ハンドリング（生体を手で触ること）が割と容易なため、人気がある。ヒョウモントカゲモドキ同様に様々な品種がある。

## （2）カメ目

カメは様々な種類が飼育されているが、生息場所により、大きくリクガメとミズガメに分けられる。リクガメとミズガメとでは餌や飼育スペース、飼育環境などが異なる。

<sup>4</sup> アニコム「家庭どうぶつ白書 2021」[https://test.anicom-page.com/hakusho/book/pdf/book\\_202112.pdf](https://test.anicom-page.com/hakusho/book/pdf/book_202112.pdf) 参照



図8 リクガメ販売の様子



(3) ヘビ亜目

ヘビにおいては小型のコーンスネークやボールパイソンなどが人気である。どちらも省スペースで飼育することが可能とされている。さらに色や模様の種類が豊富でコレクション性が高い。性格は比較のおとなしく、飼育やハンドリングがしやすいことからヘビ飼育の入門種としても人気が高い。

図9 ボールパイソン販売の様子



図10 コーンズネーク販売の様子



### 3. 爬虫類を取り巻く問題

爬虫類に関して、以下の4点の問題が考えられる。

- ① 展示即売会の問題
- ② 人獣共通感染症の問題
- ③ 動物愛護の問題（環境エンリッチメント、終生飼養）
- ④ 逸走・遺棄等による環境へのインパクト

#### ① 展示即売会の問題

環境省及び事務局のヒアリングの結果、爬虫類専門獣医師や事業者より、展示即売会（イベント販売）の問題が多数挙げられた。※資料2-1にも記載

#### 事業者

- ・ 移動販売のため動物の世話が行き届いていないことがある。  
→イベントからイベントへと移動する業者の場合、バックヤードでの生体のメンテナンスができていないことが多い。イベント中に死ぬこともある。
- ・ 店舗と違い、イベント会場は人の出入りが激しく、購入者に販売説明が十分にできないことがある。
- ・ 生態価格を他店と比べられ、値切られることが多い。また、イベント最終日などは売り上げ確保のために投げ売り状態になることもある。
- ・ 販売形態として、プラカップなどに入れて売られることもある。  
→家庭での飼われ方（本来の飼育環境）が見えない。

#### 飼い主

- ・ 動物の寿命や習性や飼い方などを知らないまま、衝動買いすることがある。  
犬猫に比べて表情が乏しいため、飼育に飽きる人がいる。  
→その結果、ネグレクトや遺棄につながることもある。
- ・ 移動販売で購入すると、実店舗がなかったり、購入した店舗が遠いこともあるので、購入後に飼育方法等で分からない場合に質問することが難しい。
- ・ ペットが病気やケガをした際に、診察ができる獣医師が少ない。

## ② 人獣共通感染症の問題

爬虫類において、過度なハンドリングはストレスがかかり、体調不良の原因となる場合がある。また、爬虫類の多くは病原体の宿主であり、ハンドリングによって飼育個体から飼い主に感染するおそれがある。爬虫類がもっている病原菌として、サルモネラが挙げられ、1970～80年代にかけて、ミシシッピーアカミミガメの幼体であるミドリガメに起因する小児のサルモネラ症が報告され、一時、社会問題化した。<sup>5</sup>

ある調査では、ペットショップで販売されていた爬虫類 49 種 100 検体、および一般家庭で飼育されていた爬虫類 30 種 115 検体の計 215 検体、並びにわが国に輸入された直後の爬虫類 28 種 91 検体におけるサルモネラの保有状況を調べた。その結果、家庭飼育検体の 32.2%、ペットショップ検体の 80.0%、並びに輸入直後検体の 56.0%からサルモネラが分離された。また、野生（日本とベトナム）の爬虫類の約 3 割はすでに保菌していた。特に保菌率が高かったのは、ヘビ類であった。

爬虫類がペットとして飼われることが増えているが、このような情報を知っている飼い主は多くはない。一昔前、爬虫類の飼育者は鑑賞を主たる目的とするコレクターが多かったが、近年、爬虫類を「触る」ことを目的として飼う方も多くなっていることから、人獣共通感染症の問題があることを飼育時に気を付けるべき点として、喚起していく必要がある。

表 2 主な爬虫類の人獣共通感染症（MSD Veterinary Manual より）

<i>Salmonella</i>	ミズガメ、 リクガメ、 トカゲ、ヘビ	サルモネラ症	腹痛、痙攣、下痢、発熱、吐き 気、嘔吐（命にかかわる可能性 あり）
<i>Edwardsiella</i>	ミズガメ リクガメ、 ヘビ	胃腸炎、新生児 の敗血症および 結膜炎	腹痛、痙攣、下痢、発熱、吐き 気、嘔吐（命にかかわる可能性 あり）
<i>Spirometra</i>	ヘビ	弧虫症	炎症・疼痛を伴う皮膚結節、目 の周囲の炎症・腫れ（条虫が脳 に移動する場合あり）
<i>Pentastomes</i> ( <i>tongue</i> <i>worms</i> )	ヘビ	舌虫症	通常は無症状、寄生虫が多いと 様々な臓器の疼痛、腫瘍、管の 閉塞など

<sup>5</sup> 林谷秀樹：岩田剛敏：中臺文「爬虫類とサルモネラ」



### ③ 動物愛護の問題（環境エンリッチメント、終生飼養）

爬虫類にも、寿命が長いものがあり、サイズも飼い始めたときは小さくても時にはその何倍もの大きさに育つことがある。そのため、途中で飼えなくなったり、動物の成長に合わない飼育環境に置くことでストレスを与えたりしていることもある。飼育環境も地上性のものから樹上生活を主とするものまで様々で、必要な飼育スペースもわからないケースも多い。飼育時の環境エンリッチメントを整えるには、しっかりとした知識が必要となるとともに、カメなどの飼い主より寿命が長い動物の場合、次の飼い主を見つけておくことも必要である。

### ⑤ 逸走・遺棄等による環境へのインパクト

飼育されている爬虫類が逃げ出してしまった場合、人間社会や生態系に対して犬や猫以上に大きなインパクトを与えることもある。カミツキガメやグリーンアノールのように、逸走・遺棄等から国内に定着してしまい、人への危害や生態系の攪乱を起こし、特定外来生物となってしまうケースも多々ある。また、記憶に新しいところで、昨年神奈川県で逸走したアミメニシキヘビのようなケースでは、実際には直接的な被害が出ていなくても大きな騒ぎとなる。こうしたことを防ぐためにも、飼育時の逸走や遺棄に対してしっかりとした対策を講じる必要がある。

図 1 1 三重県の路上で保護されたコガネオオトカゲ

